

米田實 日米両国で活躍したジャーナリスト

はじめに

- ・米田實とは
- ・研究の動機

1.経歴

(1)渡米前

- 1878(明治11)年12月 福岡県久留米に生れる(1歳)
- 1893(明治26)年 中学明善校を中退して上京(16歳)
 - ・苦学しながら国民英学会などに通学
 - ・国民新聞社の人見一太郎、徳富蘇峰に知られる
 - ・人見を通じて勝海舟の知遇を得る

(2)アメリカ時代

- 1896(明治29)年11月 勝海舟の援助をうけ渡米(19歳)
 - ・ローウェル・ハイスクールに入学
 - ・福音会にも関係
 - ・『桑港時事』(1897年廃刊)の編輯に関与
- 1897(明治30)年 4月 3日 『ジャパンヘラルド』創刊に参加(20歳)
4月30日 『ジャパンヘラルド』を安孫子久太郎が買収
『桑港日本新聞』を創刊[改題?]
- 1898(明治31)年 『臆はづ誌』掲載の戯画の転載に絡み、誹謗罪に問はれる(布天連事件)→罰金50ドル(21歳)
- 1899(明治32)年 4月 3日 『日本新聞』と『北米日報』が合併、『日米』創刊(22歳)
9月 オレゴン州立大学法学部入学(22歳)
- 1900(明治33)年10月 民友社から『十二文豪号外 バイロン』刊行(23歳)
- 1901(明治34)年 6月 オレゴン州立大学法学部卒業、法学士(24歳)
9月 アイオワ州立大学大学院入学
- 1903(明治36)年 6月 アイオワ州立大学大学院修了、政治学修士(26歳)
- 1904(明治37)年 9月 カリフォルニア大学大学院に籍を置く(27歳)
 - ・この頃『日米』編輯長(主筆)として、半日を大学、半日を新聞社で過す。
- 1906(明治39)年 4月18日 サンフランシスコ大震災(29歳)
 - ・日米新聞社と共に、米田の自宅も焼失
 - ・カリフォルニア大学を退学し、日米新聞社の復興に専念

(3)帰国後①:ジャーナリストとして

- 1907(明治40)年夏 日本に帰国(30歳)
- 1908(明治41)年 5月 外報係として東京朝日新聞に入社(31歳)
- 1911(明治44)年11月 初代外報部長(34歳)

- 1915(大正 4)年 4月 外報部長のまま、ロンドン特派員(38歳)
 ・5月10日ごろ、サンフランシスコに到着
 ・11月16日、チャーチルと単体会見
- 1916(大正 5)年11月 健康を害して帰国(39歳)
- 1919(大正 8)年 7月 朝日新聞社の株式化により、26人の株主の1人となる(42歳)
- 1920(大正 9)年3/7月 外報部長の辞任を申し出、慰留される(43歳)
- 1921(大正10)年10月頃 ワシントン会議へ特派の予定が、急病で中止(44歳)
- 1922(大正11)年 4月 4日 論説委員長(45歳)
- 1923(大正12)年 1月 外報部長を退き、相談役(46歳)
 4月 8日 編集局長代理(相談役兼務)
 4月14日 編集局長代理を(非公式に)辞任
 9月 1日 関東大震災。編集室に最後まで踏みとどまる
 10月15日 正式に編集局長代理兼務を解かれる
- 1924(大正13)年 4月 外報部長に再任(相談役兼務)(47歳)
 12月 外報部長・相談役を解かれ、編集局顧問
- 1931(昭和 6)年 9月24日 満洲事変に対する社説「事変の正解を望む」執筆(54歳)
- 1933(昭和 8)年 1月 二五年勤続表彰(56歳)
 12月 東朝を停年退社・顧問
- 1946(昭和21)年 社友(69歳)

(4)帰国後②:国際法・外交史学者として

- 1907(明治40)年夏 日本に帰国(30歳)
- 1909(明治42)年 7月 国際法学会に入会(高橋作衛・寺尾亨の推薦)(32歳)
- 1920(大正 9)年 国際連盟協会に入会、評議員となる(43歳)
 4月 明治大学法学部政治学科教授(外交史担当)
- 1921(大正10)年 5月 国際法学会内に設けられた「国際連盟規約改正問題研究会」特別委員に選任(44歳)
- 1922(大正11)年 3月30日 法学博士(45歳)
 7月 国際法学会で雑誌委員
- 1923(大正12)年 4月 東京商科大学講師(外交史担当)(46歳)
- 1926(大正15)年 7月 明治大学政治経済学部独立により、同学部に移籍(49歳)
- 1927(昭和 2)年 1月 国際法学会で評議員兼編纂委員(50歳)
- 1931(昭和 6)年 9月25日 陸軍省調査班員の訪問を受け、満洲事変に対する意見を陳述(54歳)
- 1932(昭和 7)年 4月 明治大学新聞高等研究科創設により、同科講師に就任(近世欧米外交事情担当)(55歳)
- 1934(昭和 9)年12月 東亜同文会理事(57歳)
- 1938(昭和13)年 明治大学終身商議員(61歳)
- 1941(昭和16)年 3月 東京商科大学講師を依願解嘱(64歳)
- 1942(昭和17)年 1月 国際法学会で評議員(研究部)(65歳)
- 1947(昭和22)年10月10日 明治大学で最後の講義(以後休講)(70歳)
- 1948(昭和23)年 1月 9日 急性腎臓炎のため逝去(71歳)

2.業績

(1)在米ジャーナリストとして

- 『桑港時事』『ジャパンヘラルド』『桑港日本新聞』『日米』の編輯に参加

- ・ 『桑港日本新聞』『日米』では編輯長（主筆）格の存在
- ・ 大学などで移民問題史などを研究し、社説の執筆などに活用
- ・ 福音会の運営にも幹事として関る？
（1907年5月、オークランドの桑湾青年団体野外親睦会に、福音会代表として出席）

(2)日本のジャーナリストとして

①東京朝日新聞

- ・ 社内の重職を歴任
初代外報部長(1911年11月～22年12月、24年4月～12月)
論説委員(1922年4月～1933年12月)
編輯局長代理(1923年4月)
- ただし彼自身は人事・事務関係の仕事を嫌ふ

- ・ ロンドン特派員として名を馳せる
- ・ 社説の執筆を担当(1908年～33年)
- ・ 多数の署名論説を紙上に発表(25年間で240本)
- ・ 社主催の講演会で全国を講演（高原操・下村海南・杉村楚人冠などと）
- ・ 吉野作造を朝日に勧誘する(1924年)

②評論家

- ・ 『中央公論』(53本)『太陽』(41本)『文藝春秋』(16本)などに論説を発表
- ・ 全国各地で国際問題に関する講演をおこなふ

(3)学者として

- ・ 明治大学創設により法学部教授（専任）。政経学部独立で移籍(1920年～48年)
- ・ 東京商科大学講師(1923年～41年)
- ・ 国際法学会役員(雑誌委員→評議員兼編纂委員)
- ・ 国際連盟協会評議員(1920年～?)
- ・ 満洲事変直後に、陸軍調査班に対して意見を陳述
陸軍省調査班「満洲事変に対する学者の意見」『現代史資料11』みすず書房、1965年。
- ・ 『外交時報』(201本)『国際法外交雑誌』(65本)『政経論叢』(29本)などに論説を発表
→生涯通算の論説数は社説を除いても1000本を越えると推定される

3.言説

(1)事実解説の重視

- ・言論人としての自己規定

(2)現実主義的態度

- ・親ワシントン体制論

- ・その一方で、過度に理想的な議論は否定

ex) 石井ランシング協定で、軍備の必要は減じたとする者があるが、それは誤り。

「軍備の相当なる充実は、強国としての存立の要件」

「国際間の公正なる待遇と言ふものは、相当なる反抗力を具備せる邦家に対してのみ与へられるものである。之れ洵に悲しいことではあるが、昭々たる事実を奈何ともするを得ぬのである。我国にして強国としての地歩を占め、相当なる待遇を諸友強から得る為めには、軍備も遺憾ながら必要であると断定せざるを得ない。而して之は決して一二外交文書で左右せられるものではないのである」

- ・利害関係の着実な除去が日米親善の唯一の手段とする

「日米軋轢機会の掃去---是はあらゆる方面に於て行はれねばならぬ必要事項である、是れ蓋し日米親善の唯一方法であるからである、彼の観光団やら、官民各方面の御世辞の交換やら、宴会やらを以て日米親善を期する徒輩の如きは馬鹿の骨頂で、真に国交を解し得るものでは無いのである」

(3)具体的で実際の議論

- ・移民問題に対する見解

「日米両国民の意志疎通」

「帰化権の確保」

「日米開戦は非現実的」

(4)米国の内政・外交に対する評価

①内政に対しては高い評価：「輿論を反映した政治」

②外交に対しては厳しい評価：「特殊利益論を基礎とした利益本位の外交」

今後の課題

- ・年表や著作リストの完成
 - ・言説の分析
 - ・アメリカ時代の生活／言説の解明
- ①『日米』創刊期の事情
- ②当時の社説や発言の確認